



サルマン新国王の誕生と サウジアラビア情勢変動の予兆

東京大学大学院 総合文化研究科

特任准教授 辻 上 奈美江

2015年1月23日、アブドゥラー国王が90歳で逝去した。約10年のアブドゥラー国王の支配が終わったこの日、アブドゥラーの異腹の弟で皇太子のサルマンが第7代国王に就任した。サルマン新国王は、同日中に、副皇太子で異腹の弟のムクリンを皇太子に任命、さらに内務相のムハンマド・ビン・ナーフを副皇太子兼第二副首相に任命した。

《アブドゥラー国王の功績と人物》

アブドゥラーは、ファハド国王が病気になった1995年から、皇太子として実権を握ってきた。国王在位期間は10年にわずかに満たなかったが、約20年間、サウジアラビアの事実上の指導者を務めた。アブドゥラー逝去の日、サウジ情勢に詳しいアンソニー・コーデスマンは、アブドゥラーを「並外れた指導者だった」と評価した。

先代の第五代ファハド国王は、国家基本統治法を定め、諮問評議会を設置するなど画期的な政治的改革を行ったものの、王族たちの豪勢な生活に歯止めをかけることができなかった。王族の豪勢な生活を象徴しているのが、ファハド最愛の末息子アブドゥルアジーズ・ビン・ファハド元国務相だろう。彼は、国内外に複数の豪邸を有することで知られている。

他方で、アブドゥラーは質実剛健な性格で知られた。彼はそのような豪勢な生活とは無縁の

イメージを確立した。アブドゥラーは1990年代には保守的だと評されることもあったが、国民の圧倒的な支持を集めて、改革の主導者となった。

アメリカで9.11が起きたのは、アブドゥラーが皇太子として実権を掌握していた2001年のことであった。サウジアラビアは、テロ対策でアメリカに協力し、ブッシュ前大統領の中東民主化構想に応じ、地方評議会議員の半数を選挙で選出する限定的な民主化を実現した。宗教政策は「穏健なイスラーム」への大転換を図った。アブドゥラーは、宗教間対話の重要性を訴え、2008年にはマドリッド、メッカ、そして国連での会合でリーダーシップを発揮した。

若年層の増加と人口成長に対して耐久力を持ち続けることは、サウジアラビアにとっての最大の課題となった。アブドゥラーの在任中、国内の重点課題は教育と人材育成であった。教育が支出に占める割合は拡大し続け、2014年には全支出の約25パーセントが教育に充てられた。アブドゥラーは高等教育を重視し、アブドゥラー王科学技術大学、プリンセス・ヌーラ大学の設立を支援した。2005年にはアブドゥラー王奨学金を開始し、欧米諸国や日本を含むアジアに留学生を送り、その数は年を追うごとに増加した。人口成長に伴ってエネルギー需要も高まったため、アブドゥラー国王原子力再生可能エネルギー都市 (KA-CARE) の設立を指示した。

2011年、「アラブの春」がサウジアラビアに波及すると、腰の手術のために米国滞在中だった国王は急遽帰国し、公務員には最大3ヵ月間の給料ベースアップ、若年層の失業対策、住宅ローンの拡充などの経済対策を行った。また、同年9月には女性への参政権付与を約束した。実際に、諮問評議会では、2013年1月から、150人の議員のうちの30人の女性の諮問評議会議員が誕生した。

《アブドゥラー晩年の勢力分布》

アブドゥラーは、晩年に向けて勢力固めを試みた。国王としての強大な権力を行使し、自らの息子や信頼のおける人物にポストを与えていった。第一にそのポストを与えられたのは息子のムトゥイブで、2010年から父アブドゥラーが長年勤めた国家警備隊長官のポストを譲り受けた。国家警備隊は、2013年、国家警備省に格上げされ、ムトゥイブは国家警備相となった。同2013年2月、アブドゥラーは、アブドゥルアジーズ初代国王の息子のうち、生存しているもっとも若い息子ムクリンを副皇太子兼第二副首相に任命した。副皇太子兼第二副首相のポストは2011年10月にスルタン皇太子が死去し、副皇太子兼第二副首相であったナイフが皇太子に任命された時から空席となっていた。副皇太子のポストは、実質的には王位継承第二位を意味する。アブドゥラーが信頼するムクリンを副皇太子兼第二副首相に任命したことで、第二世代(アブドゥルアジーズ初代国王の息子たちの世代)による王位継承には終止符が打たれた。同2013年12月には、2007年からメッカ州知事を務めてきたハーリド・ビン・ファイサル(ファイサル第三代国王の息子)を解任し、アブドゥラーの息子ミシュアルを同職に着かせた。ミシュアルは2009年から、開発の遅れていたナジュラーン州の州知事を務め、同地域の発展に寄与した。メッカ州知事への昇進は、彼の功績に報いる意

筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士(学術)。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師などを経て現職。

著書に『現代サウディアラビアのジェンダーと権力』(福村出版、2011年)、共著に『中東政治学』(有斐閣、2012年)『中東イスラーム諸国民主化ハンドブック』(明石書店、2011年)『グローバル政治理論』(人文書院、2011年)、共訳に『中東・北アフリカにおけるジェンダー』(明石書店、2012年)『21世紀のサウジアラビア』(明石書店、2012年)など。

専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

味もあったとされる。翌2014年5月には、別の息子トルキーをリヤド州知事に任命した。別の息子アブドゥルアジーズには、2011年に外務副大臣のポストを与えていた。息子や信頼できる人物を登用することで、経験を積ませようとしたことは明らかである。

この段階では、ファハド時代には優勢を誇ったステイリ・セブン(アブドゥルアジーズ初代国王に寵愛を受けたヒッサ・アル＝ステイリの7人の息子)は、サルマン皇太子など一部を除いてその勢力は後退気味であった。知性派の、ファイサル国王の息子たちも、存在感を薄めつつあった。ファイサルの息子ハーリドはメッカ州知事の職をアブドゥラーに解任され、教育相に任命されたが、降格人事と噂されていた。ハーリドの弟のトルキー元総合情報庁長官(駐英大使、駐米大使を歴任)は、ファイサル王財団の会長を務めるのみで、公職からは離れていた。

だが、アブドゥラーは、ムトゥイブを副皇太子には任命しなかった。サウジアラビアの王位継承問題に詳しいサイモン・ヘンダーソンは、2013年に発表した論考において、国王になるための条件として、血統、年齢、経験、見識、人気、人格などの項目を挙げている。アブドゥラーは、王族内での権力関係や世代交代の観点から、第三世代への移行はやや性急と考えたのであろう。このように息子を王位継承ラインに乗せられなかったことに不満はあったと思われる

ものの、新たに形成された「アブドッラー派」勢力は拡大に向けて動き出したかと思われた。

《アブドッラー国王の死去とサルマン新国王の大胆な人事》

2014年12月31日、アブドッラーが入院したと報じられた。王宮には卓越した医療チームがスタンバイしている。入院は深刻な病状を意味した。少し前から、アブドッラーが公の場に出てくることは稀であった。2014年10月中旬、サウジアラビアを訪れたタミーム・カタール首長とアブドッラー・ヨルダン国王とそれぞれ接見した他は、滅多に公の場に姿を見せることはなかった。

2015年1月23日、アブドッラー国王逝去のニュースが流れると、サルマンが新国王に即位した。サルマンは、エネルギーと外交についてアブドッラー時代の政策を今後も継承すると述べた。そして6件の勅令を発出し、ムクリンを皇太子に、ムハンマド内務相を副皇太子兼第二副首相に任命した。

国王逝去の当日に、副皇太子を任命したことは、サルマン新国王の強い意思表示であったと思われる。慣例では、副皇太子は空位の期間が設けられることもある。2011年10月のスルタン皇太子死去によって、ナーイフが皇太子にスライドした際にも、副皇太子は空位となり、この状態は2013年2月まで継続した。過去の慣例では、むしろ一定の空位期間が置かれるほうが、王族内でも、国民にも動揺を与えないとされていたと思われる。また、今回の副皇太子任命は、第二世代の高齢化が進む中、第三世代への世代交代の観点から注目度の高い人事であった。そのような重要な事項が、国王逝去の当日に突然決定されたのである。

1959年生まれとされるムハンマド・ビン・ナーイフが副皇太子に任命されたことで、年齢と実績、資質を重んじるはずのサウード家の王位継

承に、急激な「順番抜き」が起きたことも見逃せない。第三世代で王位継承が有望視されたことがあった人物には、ハーリド・ビン・ファイサル、バンドル・ビン・スルタン、ムトゥイブ・ビン・アブドッラーらがいる。ハーリド・ビン・ファイサル（ファイサル元国王の息子、1940年生まれ）は、この翌週の人事でメッカ州知事に返り咲いたものの、王位継承ラインには乗ることができなかった。駐米大使、総合情報庁長官、国王特使を歴任したバンドル・ビン・スルタン（1949年生まれ）は、同じく翌週の人事刷新でサルマン新国王に国王特使の職を解かれてしまった。アブドッラー国王の息子ムトゥイブ・ビン・アブドッラー（1952年生まれ）は、アブドッラー国王がおそらく第三世代の王位継承ラインに乗せたいと強く願っていた人物であったはずだが、今回、完全に肩透かしを食らった。サルマン新国王の息子、スルタン・ビン・サルマン遺跡観光庁長官（1956年生まれ）は以前から王位継承の可能性は低いと見られていたが、それでも新国王の生存する息子のうち最年長でありながら、王位継承ラインに乗れなかったことはショックであったに違いない。

この日の勅令には、この「順番抜き」をさらに加速させるかもしれない人事異動があった。サルマン新国王は、自らの息子であるムハンマド・ビン・サルマンを国防相兼王宮府長官に任命したのである。ムハンマド・ビン・サルマンは、1980年生まれの若いプリンスで、サルマン国王の第二夫人の息子である。ムハンマド・ビン・サルマンの前職は皇太子府長官と国務相であるが、同職に就いたのは2013年からであり経験は浅い。ヘンダーソンによれば、ムハンマドはこの短期間で「明敏な官僚機構運営者」との評価を得たとされる。だが、彼に対する評価はさまざまで、真に有能かどうかを判断するには、もう少し時間がかかりそうだ。だが、評価が定まらない彼が、ふたつの枢要な職位を獲得

した。第一の国防相のポストは、故スルタン皇太子（当時は国防航空相）およびサルマン新国王が務めた、王位継承ラインにつながる可能性の高い、極めて重要なポストである。王宮府長官のポストも、同様に極めて重要である。前任者であるハーリド・アル＝トワイジリは非王族であったが、王宮府長官は非王族としては最高の職位であった。ハーリドは、国王私設秘書も兼務していた。王宮府長官職は、ハーリドの父アブドゥアジーズから受け継いだものであった。トワイジリ家は、サ우드家との長期的な信頼関係を築き、その過程で王宮府の門番としての地位を確立したのである。トワイジリ家の許可や関与なく王宮に出入りできないとも言われたほどで、その地位を活用して、ハーリドは周辺国との関係を築いてきた。エジプトにおける2011年の「革命」の阻止、バーレーンでのデモ鎮圧などは、ハーリドの力によるところが大きかったとされる。また、アブダビのムハンマド皇太子との良好な関係を築いたことでも知られた。

《1月29日、さらなる人事刷新》

サルマン新国王は、アブドゥラー国王死去の6日後の1月29日に、さらに34件の勅令を出して大幅な人事刷新を行った。この際、故アブドゥラーが形成しつつあった「アブドゥラー派」は、脆くも崩壊したことがはっきりした。アブドゥラーはリヤド州知事およびメッカ州知事に、それぞれ息子を任命していたが、この日の勅令でいずれも解任されたのである。リヤド州知事には、第二世代バンドル王子の息子、ファイサル・ビン・バンドル・カシム州知事を任命した。またメッカ州知事には、2007年から2013年までメッカ州知事を務めていたハーリド・ビン・ファイサル（2013年～2015年、教育相）を呼び戻した。

他方で、カシム州知事からリヤド州知事に

昇進したファイサルの同腹の弟ハーリド・ビン・バンドル総合情報庁長官は、その職を解任され、国王顧問（閣僚級）に新たに任命された。ハーリド・ビン・バンドルはリヤド州知事、国防副大臣など重要職を歴任した経歴を有する。だが、いずれも在任期間が非常に短い。今回任命された国王顧問職が降格になるかどうかの判断は難しいが、英サンドハースト卒のハーリドには適任とは言いがたい。

サルマン国王が自らに近しい、信頼する者を要職に就けていることは明らかであるが、彼らの間に明らかな優劣があることは軽視できない。最も顕著な例は、29日に閣僚級として改めて石油副大臣に任命されたアブドゥルアジーズ・ビン・サルマンである。1960年に生まれたアブドゥルアジーズは、サルマン国王の第一夫人の子である。2005年から副大臣に任命されており、ヌアイミ現石油相の後継者として有力視されてきた。サウジアラビアは、長年、石油や経済、金融の実務面の運営は、海外で博士号を習得したような非王族の専門家（テクノクラート）に委ねてきた。石油省を率いてきたヌアイミ大臣もその一人であるが、79歳と高齢である。アブドゥルアジーズが閣僚級に昇格したことで近い将来、「王族テクノクラート」とも呼ぶべき人物が出現する可能性が出てきた。ただし、アブドゥルアジーズの昇格は、本人にとっては諸手を上げて喜べるような待遇ではなかっただろう。前週には、自らよりも20歳も若い、異腹の弟ムハンマド・ビン・サルマンが、国防相と王宮府長官という二つの要職に任命されたばかりであった。ムハンマドより年齢が高く経験も長いアブドゥルアジーズにとって、閣僚級への昇格は満足できるものではなかったに違いない。

《非王族の人事刷新と専門評議会の廃止》

非王族閣僚の人事も大きく動いた。サウジアラビアでは、油価の低迷に対応するためとして、

アブドゥラー逝去直前の2014年12月7日に大規模な内閣改造が行われた。新たに任命された大臣は、イスラーム事項相、高等教育相、保健相、文化情報相、情報技術相、社会事項相、農業相、運輸相および国務相であったが、このうち運輸相と国務相以外のすべての大臣が1月29日には解任された。非王族閣僚についてどのような人選が行われたかを評価するには少し時間がかかりそうであるが、たとえば文化情報相は、検閲を含むメディア管理の総括や、毎週開催される閣僚会議後のスポークスパーソン的な役割を担っている。新任のアーデル・アル＝トゥライフィ文化情報相は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで博士号を取得し、アル＝アラビヤに勤務していた、いわゆる「リベラル」な人物であるとされている。情報技術の発達でメディアの役割が一層重要になる中で、新大臣の任命は、内外からの批判・不満への耐性を高める目的があるとも考えられる。

その他、港湾局、国家反汚職委員会、勸善懲悪委員会幹部も刷新の対象となった。このうち勸善懲悪委員会はサウジアラビアの宗教政策の一部を担う機関である。前長官のアブドゥルラティーフ・アル＝シェイフは、大勢の面前であれば公共の領域で男女が同一の空間に居合わせることに問題がないとして、女性下着専門店における女性販売員の雇用に賛同した人物であった。同委員会の長官として新たに任命されたアブドゥルラフマン・アル＝サナドは、マディーナ・イスラーム大学の学長であり、一部のサウジ人からは宗教的には中道派と評価されている。勸善懲悪委員長官交代の意図の解明にも、時間を要するだろう。

勅令では、12の専門評議会を廃止することも決定された。廃止された評議会のなかには、教育政策高等委員会、高等教育大学評議会、教育最高評議会など教育関連の評議会、石油鉱物最高評議会や経済最高評議会などのエネルギーお

よび経済関連の評議会、そしてアブドゥラー国王の肝いり事業のひとつアブドゥラー国王原子力・再生可能エネルギー最高評議会、さらにはイスラーム事項最高評議会がある。これらに代わって、今後はムハンマド・ビン・ナーフ内相が議長を務め、ムハンマド・ビン・サルマン国防相、ムトゥイブ国家警備相を含む9人で構成される政治安全保障評議会、およびムハンマド・ビン・サルマン国防相が議長を務め、石油・経済・財務関連の閣僚を中心に22人で構成される経済開発評議会によって意思決定が行われる予定である。

このような機構再編は、実際に政策に影響を与え始めている。2月9日の報道では、教育省が、アラブ諸国に留学中の教員志望の大学院生に帰国を促している。記事では、帰国要請の理由は、教員になるための教育機関がサウジアラビア国内に完備されているから、とされているが、同時に過去数年間で留学生が急増したことへの懸念も示されている。コーデスマンは、アブドゥラー逝去直後に発表した論考で、アブドゥラー国王がいかに若年層に配慮してきたかを強調している。もし今後、留学を制限するような方向へと向かえば、アブドゥラー時代の政策からの大きな転換を意味する。

《国民の懐柔》

さらに1月29日の勅令では、公務員、軍人、大学生、留学生、年金受給者、社会福祉対象者、障がい者に、それぞれ2ヵ月分の給与や手当、報酬を与えた。そして障がい者認定を待っていたすべての人を、障がい者として認定すると決定した。この特別手当の受益者は、地元紙によると600万人になるという。約2,000万人強のサウジ国籍者のうちの3、4人に一人が手当を受けることになる。受けられないのは、民間企業の経営者・被雇用者、自営業者、高校生以下の子どもということになる。受給額を平均1万リ

ヤルとすると、特別手当の合計は600億リヤルにのぼる。加えて、プロのスポーツクラブに1,000万リヤルずつ、社会問題省認定組織への20億リヤルなどを付与することが決定し、これらの総額は1,100億リヤル（293億ドル）となる見込みである。

さらに国王は、2,500人の受刑者に恩赦を出した。殺人、麻薬密売、マネーロンダリングに関与した者への恩赦は行われなかったが、レイプ、誘拐、追い剥ぎ、公文書偽造の罪などが恩赦の対象となるという。50万リヤル以下の罰金も帳消しとなった。

サウジアラビアでは今年、油価暴落による財政赤字が見込まれている。赤字額は1,450リヤルともされており、1,100リヤルの特別手当は、サウジ政府にとって多額の支出であることに違いない。サルマン国王は、多額の支出にもかかわらず、国民に対して謙虚な態度を示した。彼は公式ツイッターで「寛大なる国民よ。あなたがたはもっと報われるべきである。私があなたがたに何をしようとも、あなたがたに見合うことはない」と述べたのである。

《サルマン新体制の展望》

アブドゥラー逝去からわずか数週間で、サウジアラビアは早すぎるとも言える変化を経験した。ヘンダーソンは、1月30日に発表した論考で、一連の人事刷新はアブドゥラー国王逝去の前から決められていたと分析しているが、その可能性は高い。大規模な人事刷新は、王族内の勢力バランスに変更を強いることになる。非王族については個人のみならず、部族間の勢力など伝統的紐帯にも影響を及ぼす可能性がある。国民への特別手当については、今のところ不満が表面化している様子はないが、それぞれの給料や手当を単純に2ヵ月分支給するような方法では、格差がますます広がってしまう。受給対象とならなかった層の不満も予想される。彼らが突然、暴徒化するようなことは想像しがたいとしても、不満が蓄積されることには留意が必要だろう。大規模な人事刷新と機構再編、そして国民の懐柔は、今後はサウジ情勢がめまぐるしく動くことの兆しといえる。